

ウィーンの街角で

ウィーンも7月、8月は夏休みとなり、街全体がなんとなくガラんとした感じになる。自分の車でヴァカンスにでかける人も多く、普段は熾烈な競争になる路上の駐車スペースも簡単にみつかる。土地の人間と交替して名所旧跡や街頭にあふれるのは観光客ばかりとなり、私などはとたんに外出

がおつこうになる。

外国に居住している日本人が共通して持つ面白い心理がある。それは「日本からのパック旅行者とだけは間違えられたくない」という気持ちだ。

なぜそうなるのかは不明だが、アパートを借り、言葉も勉強し、「生活」を始めるようになると、誰もが不思議とそう思うようになる。

観光客としての日本人を眺めてみよう。女の子は皆同じようなファッションで歩き、オバサン達は群れをなして御土産を買いあさる。何となく会社へ行く格好から脱皮できな

いているオジサン達、前から見ても後ろから見ても頼りなげな男子、眼鏡が多いのはさておき、万人に共通しているのは首から下げたカメラかビデオ；、という実態は、日本人の理想像としてはちょっと悲しい。

もっともこの頃私はこれを逆手にとつて、写真撮影のために外出する時など「モロ観光客」という姿に徹することになっている。

小さなリュックを背負い、ウエストポーチをつけ、スニーカーを履く。こうしていると、本当は撮影を遠慮すべき場所でも、何となく大目に見てくれる事があるような気がするから不思議だ。



ウィーン市内



ハトにえさをやる女性

焼き栗売り



アルト=エアラー市営住宅



ドナウ運河の遊覧船